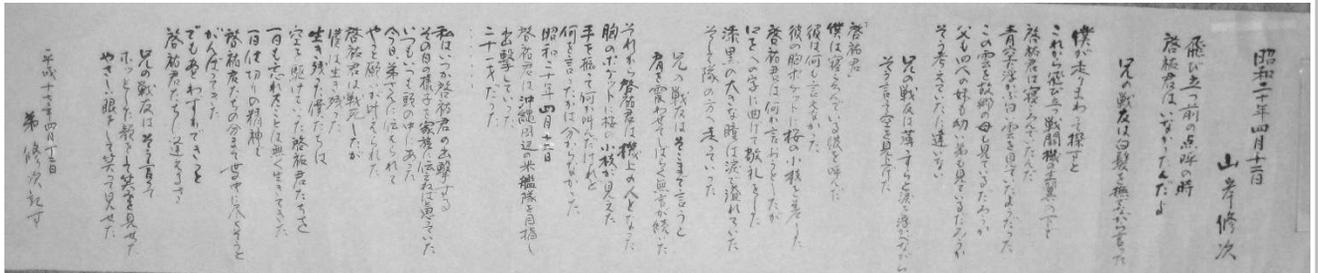


氏名 山岸 啓祐(21歳) 出身 栃木県
 期別 第18期乙種飛行予科練習生(昭和17年5月土浦入隊)
 所属部隊 宇佐海軍航空隊
 特攻部隊 神風第二 八幡護皇隊
 戦没日 昭和20年(1945年)4月12日
 状況 神風第二 八幡護皇隊として第二国分基地を発進、沖縄
 周辺海域の敵艦船に九九艦爆爆装で攻撃突入(操縦員)
 (聯合艦隊告示第143号)

昭和二十年四月十二日 山岸修次(弟) 作



昭和二十年四月十二日

山岸 修次

飛び立つ前の点呼の時
 啓祐君はいなかったんだよ

兄の戦友は白髪をなでながら言った
 僕が走りまわって探すと

これから飛び立つ戦闘機の主翼の下で
 啓祐君は寝ころんでいたんだ
 青空に浮かぶ白い雲を見ていたようだった
 この雲を故郷の母も見ているだろうか
 父も四人の妹も幼い弟も見ているだろうか
 そう考えていたに違いない

兄の戦友は薄っすらと涙を浮かべながら
 そう言つて空を見上げた

「啓祐君」
 僕は寝ころんでいる彼を呼んだ
 彼は何も言えなかった
 彼の胸ポケットに桜の小枝を差した

啓祐君は何か言おうとしたが
 口をへの字に曲げて敬礼をした
 漆黒の大きな瞳は涙で溢れていた
 そして隊の方へ走っていった

兄の戦友はそこまで言うと
 肩を震わせてしばらく無言が続いた

それから啓祐君は機上の人となった
 胸のポケットに桜の小枝が見えた
 手を振って何か叫んだけれど
 何を言ったか分からなかった

昭和二十年四月十二日
 啓祐君は沖縄周辺の米艦隊を指し
 出撃していった
 二十一才だった……



私はいつか啓祐君の出撃する

その日の様子を家族に伝えねばと思っていた
 いつもいつも頭の中にあつた
 今日、弟さんに伝えられて

やつと願いが叶えられた
 啓祐君は戦死したが
 僕は生き残った

生き残った僕たちは
 空を駆けていった啓祐君たちを

一日も忘れたことは無く生きてきた
 一日仕切りの精神で

啓祐君たちの分まで世の中に尽くそうと
 がんばってきた

でもあとわずかでできつと
 啓祐君たちに逢えるさ

兄の戦友はそう言つて
 ホッとした顔をして笑顔を見せた
 やさしい眼をして笑つて見せた

平成十七年四月十二日

弟修次記す